

ささごだいら りょうせんあいくち
笹子平の両尖七首

市指定有形文化財（考古資料）



漆山地区を流れる織機川おりはたがわを上流にさかのぼり、東に入った沢奥に笹子平すがりだおおのだいらと呼ばれる一帯があります。笹子平は標高 680m の高地にあり、須刈田大野平遺跡など縄文遺跡が数多くある山地の一角に位置しています。

「笹子平の両尖七首」は、昭和 31 年笹子平の約 7000 年前（縄文時代前期初頭）の遺跡から開墾かいこんをきっかけに発見されました。全長 18.2cm、硬質頁岩けつがん（※1）製の打製石器で、両先端が尖っており、上部は大きな槍先状で、下部は細長い握り状で先端が小さな三角形となっています。全体には鹿の角でできた道具（鹿角器）等を使って剥がしとるなどの二次加工による調整がなされ、整った美しい形態をしています。以前は「石鋒」「石銛」など、さまざまな呼称で呼ばれていましたが、縄文文化研究の第一人者であった山内清男氏やまのうちのすがおが「両尖七首」（両端が尖ったつばのない短刀）と名付け、以降

この名称で呼ばれるようになりました。縄文時代の極めて限られた時期の縄文集落における、宝器ほうき（宝物）のような物であるとみられていますが、実際の用途は分っていません。

この笹子平の両尖七首には、赤湯地区から高島町にかけて広がる大谷地にある約 5800 年前（縄文時代前期半ば）の押出遺跡おしだし（高島町）から出土した「押出型ポイント（※2）」と呼ばれる特殊形状の石器の製作技法のルーツが認められます。押出型ポイントは、米沢盆地では生活用具として使われた石器ですが、東北地方から関東地方に伝わると、関東地方の縄文集落では宝物として扱われました。笹子平の両尖七首は、はたしてどう扱われていたのでしょうか。

※1＝薄い板状にはがれる岩で石器の材料となる。

※2＝ポイントは尖頭器とも呼ばれる。槍の先端に付け主に狩猟のために用いられた。

南陽市文化財保護審議委員 佐藤鎮雄
平成 30 年 11 月 1 日号 市報なんよう掲載